

物語分析のためのメタファーの位相

笹川 洋子

Phases of Metaphor for Narrative Analysis

Yoko SASAGAWA

要 旨

映像、ファッション、絵画、そして文学作品など、私たちの生活世界はメタファーに彩られている。そして、私たちの感覚はしばしばメタファーに驚かされ、揺り動かされる。とりわけ文学作品は、豊かなメタファー表現で彩られる。ここでは、文学作品を分析するメタファー理論をとりあげ、メタファーはどう捉えられるのか、先行研究を概観し、文学作品を分析するためのメタファーの位相を探りたい。

まず、〈喩〉を扱った先行研究により、メタファーの範囲を確認する。次に、認知言語学分野での概念メタファー分析を概観した上で、語用論研究における含意としてのメタファー、そして橋元（1989）の命題内の分析範疇の転写によるメタファー分析、さらに仮人称発話行為としてのメタファー分析の手法を確認する。さらに、橋元の仮人称発話行為という分析視点が、これまでメタファー分析の視野からは外れてきたメタファーのアイロニー効果をとらえる可能性について触れ、物語を分析するためのメタファーの位相を整理する。

キーワード：メタファー 位相 物語分析

1 はじめに メタファー分析の視点

詩人の笹原常世は詩集「假泊港」(2002)に「紙飛行機」と題した四行詩を載せている。

飛行機のかたちに 紙を折り畳んでゆく。
その時 風も一緒に折り畳む。
あまりに深く折り目をつけすぎて 青空の端まで折り畳んでしまう。
折り畳んだ風と青空をゆっくりほどいて 紙飛行機は飛んでゆく。

「紙飛行機より」

この詩には難解な言葉は使われていない。私たちのごく身近にある言葉が選ばれ、組み合わせられている。しかし、この詩を読み終えた時、私たちの心に広がるのは、鮮烈で、これまで出会ったことのない、新しい感覚のイメージである。それは、日常とは別の次元にあるイメージと言えるかもしれない。これが芸術作品におけるメタファーの力であろう。

では、私たちはどのように、そしてどのようなメタファーのイメージを思い起こすのだろうか。私たちは「折り畳む」という行為から「広げてあるものをきちんと小さくまとめる」そして「丁寧に折る動作を行う」というイメージを思い起こす。まず、飛行機の形が折り畳まれ、次に自由な風も、そして広大な青空は端までも紙飛行機の内に入り込まれる。しかし、紙飛行機が飛ぶ時、折り畳まれた風と青空は「ゆっくりほどかれ」、再び解き放たれる。そして、紙飛行機はどこか遠くの彼方へと飛んでゆく。ここでは外から内へ取り込まれ、また外へ放たれていく動きを感じられる。あるいは自由な状態から束縛され、また自由な世界へ解き放たれるというイメージの動き、広がりを読み取ることができる。さらに、抽象的なメタファーの次元に下りてみよう。折り畳まれる紙飛行機を「容器」とすると、風や空がそこに折り込まれていき、紙飛行機が飛び立つ時、「容器」がほどけ、風や空が解き放たれてゆく、旅立ちなどという

イメージが浮かんでくる。

このように、メタファーとは映像や音楽、文字など何らかのイメージを心に呼び起こすものであると言われる。では、文学作品における豊潤なメタファーはどのように分析されるのだろうか。次にどのように文学テキストにおけるメタファーを分析できるかを、メタファーの範囲、メタファーの構造的移行から考えてみよう。

2 メタファーの範囲—〈喩〉越境するメタファー

冒頭にあげた笹原常世の詩は「假泊港」という題名の詩集に収録されている。この題名は、「假に留まる港」だが、私たちは「假泊港」という言葉から現在から未来へと移ろっていく時間の流れ、そして旅立ち、人生の意味などへと思いを深めることができる。そして、詩人は「港の人」という出版社から詩集を出版している。さらに詩集は、上部を裁断せずに残す、フランス装と呼ばれる仮製本の手法で製本されている。詩人のメタファーはどこまで広がっていくのだろうか。ここでは、文学作品におけるメタファーの範囲について考えてみよう。

こうしたメタファーの広がりには〈喩〉という概念によって言及しているのが、河添房江（1992）である。

喩は、単語からまとまった章節まで、様々な位相で物語の根幹にふれていく問題性をはらんでいる。喩という概念を特立させる以上、比喩分析の枠を超えて思い切った飛躍も望まれるのである。喩は超レトリックであるがゆえに、象徴の領域に踏み込んだり、物語の構造へと分け入る方途ともなろう。本書での分析の範囲も、比喩表現にとどまらず、先にふれた情景描写、そして時間表現、呼称の問題などに拡大している。喩の対象として花や光をはじめ、暁などの境界的時間にも注目し、さらに応用編として、「源氏物語」の第一部のライト・モチーフともいえるべき王権の問題を、喩

の観点から扱っている。

(河添房江、1992：9)

言語による比喩表現を超え、情景描写、時間表現、物語の背後にある主題まで、言語表現の範囲を越境していく動力をもつ〈喩〉とはどのようなものだろうか。

「喩」は中国の試論や日本の歌学の用語であり、古代歌謡や「古今集」分析に使われ、「古今集」の序詞、掛詞、縁語、見立て、擬人などの表現・発想は〈喩〉という観点から表現構造に位置づけられるという(鈴木宏子、2000：28)。また、高田祐彦(1987：453)は〈喩〉という用語を用いることは「さまざまな形態の異なった表現を、発想・認識の次元から包括的に扱える」、「比喩の形をとっていない表現についても比喩表現と同次元で捉えられる」と記す。ただし、同時に「比喩表現の形態上の際に基づく微妙な表現機能の違いを閉却しかねない」ことに触れている(高田祐彦、1987：453)。この点は次節で述べる概念メタファーの課題でもある。つまり、含意としてメタファーを捉えると、「少女は百合のようだ」「少女は百合だ」が同じ意味になり、微妙な違いが曖昧になってしまうのである。

ここで注目したいのは、多元的なメタファーとしての〈喩〉の広がりである。この点について河添(1992)は次のように記している。

「源氏物語」に特徴的なのは、換喩的な命名を、それにとどめず、さりげなく隠喩(メタファー)の域にまで高めて、登場人物をじつに印象的にかたどるという現象である。たとえば「夕顔」は、夕顔の咲く宿の女であり、また光源氏に「夕顔の歌」を送りつけたという点では、典型的な換喩表現の典型であった。ところが下賤な場所で、夕べにひっそりと咲き出し、朝にはしぼみ果ててしまう、そのはかなげな花のイメージは、そのまま彼女のあり様に重ねられ、その存在の隠喩(メタファー)と化している。物語はメタファーとしての「夕顔」の効果を高めるかのように、彼女に白い衣装をまとわせ、夕べの陽光のもとにたたずませたりもする。夕顔巻では、

隠喩のもつ転位や異化の機能が最大限に発揮されていることになろうか。

(河添、1992：10)

さらに河添（前掲書）は、〈喩〉を物語の主題を紡ぐ比喩表現にまで広がるものとして言及している。物語の主題は、重層的にメタファーを重ねることにより表現されているが、この点は後述する概念メタファーの理論でもLakoff George & Mark Turner (1989：27) により、最も強い詩的效果を生じさせるのは概念メタファーの「組み合わせcomposing」であると論じられている。

「光る君」の呼称が、高麗の相人という海彼の観想の達人から奉られ、聖徳太子遺愛の数珠が百済という異土から献上された品であることに象徴されるように、主人公は外側の世界から荘厳されていく。その後も、光源氏は、舶載の富を特権的に占有したり、高麗の相人の贈物や須磨・明石の絵日記を回顧するなど、いわばその外部性の起源を確認することで、王権譚を更新していく。

(河添、1992：13)

先行研究では、メタファーは文学作品の語彙、そして文章に表現される含意として分析されるが、〈喩〉すなわちメタファーは、実は物語全体の主題に連なる壮大な広がり背景に備えている。

そして〈喩〉についての考察を通し、高田（1987：459）は「あえて断定的な物言いをすれば、喩の発想がことばの内部に入りこんでいる。換言すれば、ことば自体の内部に喩が構造化されている」と述べている。このことばの内にある〈喩〉の構造に迫る試みが、認知言語学研究における「概念メタファー」研究、そして語用論分野での橋元良明（1989）のメタファー研究である。

3 概念メタファーから捉えるメタファー

テキストに表現されるメタファーを分析する理論枠組みとして、メタファー

とは何かを視覚的に簡潔に表現しているのが概念メタファー (conceptual metaphor) である。概念メタファーについてLakoff George & Mark Johnson (1980)、Lakoff & Turner (1989)、鍋島弘治朗 (2016) などでは、メタファーではサキ領域 (target domain) で矛盾がない限り、モト領域 (source domain) からサキ領域へイメージ・スキーマが写像 (mapping) されると説明される。つまり、メタファーとは離れた領域間の対応関係、すなわち写像 (構造的対応関係) であると言えよう。

概念メタファーの基本的な考え方を概観する。概念メタファーは、メタファーを文法・表現形式を超えて、捉えることができる。これは<喩>のメタファーを捉える範囲と共通する。

概念どうしの対応でメタファーを理解することから「隠喩、直喩といった従来比喩の形式として考えられてきたものだけではなく、ある概念を別の概念で理解することができる概念メタファーが基底にあれば、さまざまな文法形式をとることができる (兼沢純子、1995: 63)」。つまり、隠喩と暗喩は、例えば「ように」のような明示的な文法形式を用いるかどうかによって区別されるが、概念メタファーの考え方では、写像の対応関係を見るため、この点は捨象されることになる。

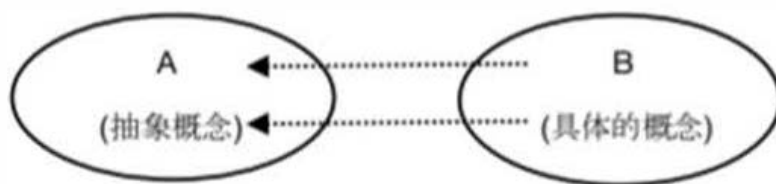


図1：概念メタファー (谷口、2006: 79)

また、概念メタファーは日常的なものである。そして、概念メタファーは、私たちの日常的な思考や行動の根底にあり、言うなれば私たちの知識や思考パターンであるメタファー思考から生み出される。つまり、文学作品は独創的な比喩表現で表現されているが、実は基本的で身近な概念メタファーを用いている。(Lakoff & Turner、1989: 26、清水啓子、2007: 19、他)。

例えば、詩人の笹原常世は詩集『仮泊港』で「思い出を折りたたむ」という表現を用いる。

この表現が常套句の「思い出を消す」あるいは「捨てる」という表現と違うのは、折り畳むという行為に「丁寧に扱い、しまう、目の前には置かないがおそらく保持される」などの意味を含むことである。そして、「折り畳む」という概念メタファーは私たちが日常的に保持しているものである。

このように、日常的に保持している概念メタファーにより、私たちは対応する概念メタファーを比較的容易に抽出することができる。

また、最上英明（1994：75—78）は、議論（Argumentation）は戦争・旅・容器・建物のメタファーであることを Pielenz Michael（1993：5—6）のドイツ語の例をあげ論じているが、ドイツ語に対応可能な日本語訳があてられることから、これらの概念メタファーは日本語にも当てはまることがわかる。

議論は戦争（Krieg）「彼は議論のあらゆる弱点を攻撃する」

議論は旅（Reise）「我々はこの点から出発した」

議論は容器（Behaltnis）「君の議論は内容がない」

議論は建物（Gebäude）「彼の議論には土台がない」

そして、概念メタファーどうしの距離がある程度遠いことが必要である。「男は男だ」は一見、距離のない同じ言葉の繰り返しのように見える。しかし、ここでは「男」が男性一般の属性（強い・女性に優しい…）のうち「女性を差別する・乱暴・わがまま…」などの一般的な男性のイメージのうち欠点と対応されていることがわかる。後述する橋元（1989：165）も、このトートロジー的メタファーに触れている。

なお、概念メタファーどうしの対応は部分的である。先述した例では、「議論」の一側面がそれぞれ多様な概念メタファー、「戦争」「旅」「容器」などに対応されていることがわかる。この点について、清水啓子（2007：19）は「時間は金である」という概念メタファーの例を紹介し、「実はどんな概念メタファーでも二つの領域間の対応関係は部分的である」と記している。

さらに、概念メタファーの重なりによって、メタファー表現に広がりが生じ

る。清水（前掲書：19）も紹介しているが、Freeman Donald C. (1995：705) はシェークスピアの『マクベス』を概念メタファーから分析し、「容器」と「旅」の概念メタファーに加え、「道を進む=人生を生きる」という時間的な概念メタファーが重なり、作品に時空的広がりを持たせる効果が生じていると記している。Lakoff & Turner (1989：27) は、メタファーには「拡張extending」「精密化elaboration」「問いかけquestioning」「組み合わせcomposing」があり、もっとも強力な詩的メタファーは「組み合わせ」であり、偉大な詩作品の豊かさと説得力は、ひとつには基本メタファーによる世界の把握が幾重にも重なりあっていること (the confluence of a number of basic metaphorical perspectives) から来ていると記している (清水、2007：21—22)。

この具体的な例として、清水（前掲書：22）はマクベスにおける「眠り」の描写を次のように図示している。

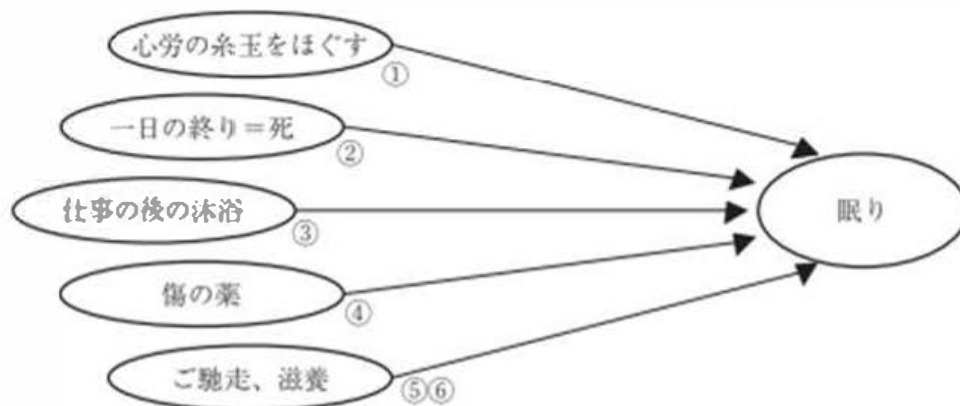


図2 「マクベスの「眠り」に対する複合的な概念メタファー」 (清水啓子、2007：22)

概念メタファーの考え方は文学研究に取り入れられ、興味深い示唆を与えている。ただし、メタファーの様々な位相を「概念の投射」と定め、概念カテゴリーどうしの対応関係を見る視点からは、位相を超えたメタファーの違いを説明することが難しい。すなわち、前述したように河添 (1992：10) は、冒頭で紹介した、源氏物語の「夕顔」の巻における「夕顔」の具体的なメタファーを様々な読み込み、さらに、通奏低音のように物語全体を流れる「王権」のメタ

ファーについても解釈を加えている。

「源氏物語」のありようは、外部を幾重にも装置化した古代天皇制の根源を照らし返すと同時に、それを異化するものでもある。物語は、主人公への外部性の刻印と更新をつうじて、皇威の本質を照らし出しつつ、それを内側から脅かしつつけるのである。(河添、1992: 13)

このように、物語全体を俯瞰する壮大な視点から捉えるメタファーの視点と一つ一つの語彙と概念の対応を探るメタファーの視点は異なるはずである。

さらに、出口菜摘(2014)はRobert Frostの詩にあるメタファーのアイロニー効果について取り上げているが、文学作品ではメタファーがアイロニーとして用いられることがある。樋口一葉の作品を、斎藤緑雨は「泣きて後の冷笑」と評したが、一葉の作品にはアイロニー効果を目論んだメタファーを多く見出すことができる(笹川、2021)。このような文学作品におけるメタファーの効果を捉えるにはどうすれば良いのだろうか。

メタファー分析に関わる、このような問題点を語用論の発話行為論の視点から顕在化し、答えを導き出しているのが橋元良明(1989)のメタファー分析の視点である。

4 メタファーの構造—含意としてのメタファー

語用論の分野におけるメタファー解釈へのアプローチのうち、ここでは二つのアプローチを取りあげる。一つは、メタファーが聞き手と話し手にどのように共有されるかというGrice Herbert Paul(1989 他)やSperber Dan & Deirdre Wilson等の関連性理論(1986/1995)のアプローチであり、もう一つは言語内容、すなわち発話命題からメタファーの構造を分析しようとする橋元良明(1989)のアプローチである。

まず、聞き手と話し手がどのようにメタファーを理解するかについて、

Griceはコミュニケーションにおける含意の共有という視点を協調原則として示している。Griceは発話された文の真理条件的内容としての「話者が言ったこと (what is said)」と、推意としての「話者が含意したこと (what is implicated)」の両者をまとめて「話者が意味したこと (what is meant)」と考えていた (高谷遼平、2016:94)。そして、それに関わる四つの会話原則「量 (長さと深さ)・質 (真実性)・関連性・様式 (明快さ)」を提示しているが、Griceはメタファーを、質の格率「偽だと思ふことを言ってはならない」に違反することで適切な解釈が導出可能となるような推意 (implicature) の一部であると論じている (高谷、前掲書:93)。しかし、内海彰 (2013:338) があげているような発話を私たちは即座に理解することができる。

「(大人に) あの人子どもだよね」

ここでは「子ども」を「わがままで自己中心的な人」という意味を拡充し、用いている。また、「子ども」という言葉は「素直、純粹、かわいい、元気…」など多様なイメージを持ちうるが、その一部に対応されていることがわかる。Griceはこのような発話は、質の格率に表面上は違反するが、私たちは会話原則を遵守するものと考え、比喩的な意味を導き出す。つまり「協調の原則や格率を故意に破り、それを逆用することによって推意を相手に伝達するということである (内海、2013:339)」。Griceは会話原則という規範が守られていると仮定することによって、規範への違反を想定し、推意が得られると考えたわけである。

しかし、橋元 (前掲書) はグライスのメタファー説が無効であることを具体的な例を示すことで、簡潔に説明している。

「おまえの足がカモシカの足ならばなあ」というように、質の格率違反がなくとも依然メタファー表現として成立している事例の存在、逆に「わたしはIQ253である」という嘘や「白髪三千丈」という誇張などのように質の格率に違反してもメタファーにならない無数の事例の存在を指摘しておけばそれで十分であろう。アイロニーにせよ、メタファーにせよ、表現

された内容が事実にそぐうか否かは、含意表現の成立の可否とまったく無関係である。 (橋元、1989：145—146)

また、Searle John (1979：105) も「字義どおりに考えた時に何らかの欠陥をもっているということが、メタファー的発話にとって必ずしも必要条件とはならない」と述べている (Searle、1979、橋本、1989参照)。

さらに、Griceの推意を表意 (言内の意味) と考えたのが、Sperber & Wilson である。彼らはコミュニケーションは、その発話が聞き手がそれを処理するのに見合うだけの関連性を伝達すると考えた。関連性はコストと報酬のバランスであり、発話解釈において最適の関連性をみつけること、認知的効果の面でもっとも労力の少ない仕方で解釈に到達することを重要視する。(内海彰、2013、339—940、他参照)

また、「創造的なメタファーは慣習的なメタファーに比べて大きな処理労力が必要であり、それに見合うだけの認知効果を得るために、数多くの弱い推意が導出される。この結果として生じるのが詩的效果であるというのが関連性理論におけるメタファーの鑑賞過程の説明である。(内海彰、2013：343)」。

文学作品で言えば、表現のための労力 (作者) とその表現の与える効果 (読者) を見繕い、作者は実際の表現形式を選ぶということになる。つまり、Grice やSperber & Wilson はメタファー理解を話者と聞き手の間で行われる含意表現に関わる調整作用と考えたわけである。この点については、Umberto Eco (1979—2011：186—187) もファブラ (Fabula：物語構造) という概念を示し、受け手 (読者) の解釈多様性が生じるほど優れた文学であると述べている。このアプローチからは話し手と聞き手、書き手と読み手のメタファー調整作用はそれぞれの状況に応じて多様なものとしてある意味で拡散していくことになる。

ただし、本稿では文学作品におけるメタファーがどのような表現構造をもっているか、作者がどのようなことを意図したか、できるだけ具体的な構造を探りたいと考える。つまり、Griceや関連性理論のように、話し手と聞き手にメタファーがどのように共有され、その表現効果を持ちうるかというアプローチ

ではなく、文学作品におけるメタファーが何を表現しようとしているのかを中心に捉えられる理論を取り上げたいと思う。橋元（1989）のメタファー論はこの意味で示唆的である。

橋元はメタファーについて次のように述べている。

メタファーがアイロニーと同様、いわば言語使用の「公理」に背離した用法に基づいて機能するレトリックであるとするものである。すなわちメタファーは、「対象指示作用」の止揚および「属性述定作用」のみの作動という原初的なメカニズムの上に成り立つ「命題行為」であり、この原理は、「真珠の瞳」などの素朴なメタファーだけではなく、「憎しみが爆発する」といった用言型などのあらゆるタイプのメタファーに適用できる。

（橋元、1989：117—118）

そして、橋元（前掲書：163—164）は、Jakobson Roman（1956）が詩的機能を「等価の原理の選択の軸を（範例的關係）から統合の軸（連辞的關係）への投影」と看破し、そこにメタファーの本質を見出したと記す。橋元は自らの著書のメタファーを扱った章に「メタファー：「指示」からの乖離」と名付けているが、この「分析範疇の転写」という視点は、認知言語学の分野から提示されたLakoff & Johnson（1980）等の概念メタファー理論につながるものである。

さらに、橋元は、どのような表現形態がメタファーになるのかという問いを立て、メタファーの形態を整理していく。橋元はそれぞれのメタファー分類のカテゴリーが、メタファーをどのように対応する範疇に転写するかを考え、メタファーを二つに大別している。「Ⅰ文の一部が他の文の部分（粹）との関係で譬喩を構成するもの」と「Ⅱ文全体が他の文との関係で譬喩を構成するもの。さらに単位を大きくしたもの」で、前者は命題単位内で完結する修辞であるが、後者は仮人称発話による発話行為と理解しようと述べている。なお、Sperber & Wilsonもメタファーを表意（言内の意味）と考えたが、これは一部のメタファー

を命題単位内にあるとした橋元の指摘と一致する。そして、〈喩〉の論議でも、概念メタファーの論議でも、文の一部がメタファーとなるものと、文全体あるいはそれを越えた物語全体の主題などに越境し、広がっていくメタファーの整理は十分行われていない。

橋元（1989：146—150）のメタファー分類は次のようになる。

I 文の一部が他の文の部分（粹）との関係で譬喩を構成するもの

(1) 対象指示型メタファー

「台風の日」「パンの耳」など、ある対象を指示するのに、元来は他の対象を指示するために用いる対象を借用する。

(2) 用言述定型メタファー

「バラが微笑む」等、ある対象の動作・状態を述定する際に、本来他の範疇の対象を述定するために用いられる動詞・形容詞などを援用する用法である。

(3) 体言述定型メタファー

「ジュリエットは太陽だ」のように、用言の代わりに体言が述定詞になった表現である。

(4) 修飾用法

「泣き出しそうな雲」のように述定詞の位置を移動し、名詞に対する修飾語句として用いた用法である。

II 文全体が他の文との関係で譬喩を構成するもの。さらに単位を大きくしたものが「譬え話」や「寓話」である。

(5) 諷喩

「これでどうやら峠を越した」等の表現や、格言や諺への言及が含まれる。諷喩は「メタファー」「提喩」「換喩」など命題単位内で完結する修辞とは異なり、仮人称発話による発話行為と理解しうる。アイロニーと異なるのは評価の下方向への視点移動がない。

さらに橋元（前掲書：159—167）はIの命題単位で完結するメタファー（1）

から(4)が、どのように転写されるかを確認していく。橋元の「分析範疇の転写」を簡単にまとめると、①と②は α 「対象」と β 「概念範疇」に直接投影させている。

α	β
男	狼

図3：あざな型メタファー（橋元、前掲書、参照）

①体言述定型（あざな型） 男は狼だ。「 α は β である」。 α と β を対照させる。

(図3)

②対象指示型 狼が来た。「 α が来た」

一方、③は α を β の述定に投影し、隠れた β の基核属性を直接示唆する。

怒 り	湯	・煮え過ぎる
		・
	ス ー プ	・さめる
		・

図4：用言述定型メタファー（橋元、1898：165より）

③用言述定型 怒りが（スープのように）煮え過ぎる。「 α が（ β のように）する。」(図4)

また、④のトートロジーは、 α を β に転写することで、実は β の隠れた基核属性を示唆する。④トートロジー 子どもは子どもだ。「 α は α “(の属性を持つ)”(図5)

子	子	・未熟
ど	ど	・
も	も	・純粋だ

図5：トートロジー的メタファー（橋元1989参照）

さらに、橋元は「等価の原理の選択の軸から結合の軸への投影」という Jakobsonの言葉を図式化している(図6、参照)。概念の投射は「人間」から

「動物」、「生物」、「無生物」「抽象概念」という順で、抽象性を高める。

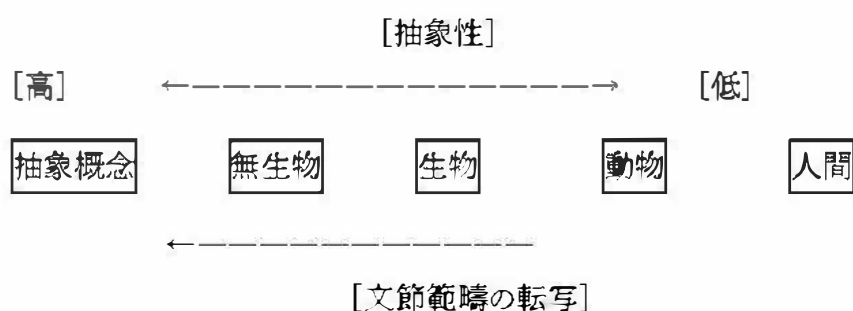


図6：橋元（1989：167より）

ここで見てきたように、橋元（1989）は語用論の分野からメタファーを論じているが、「分析範疇の転写」という視点は、認知言語学の分野から提示されたLakoff & Johnson（1980）の概念メタファー理論と共通するものであり、さらに体言指示型、用言述定型の位相を明らかにした発展的なものである。

なお、橋元のアイロニー、そして諷諭をとらえる仮人称発話の理論は、概念メタファー理論から欠落している、単一の語彙やテキスト（命題）を超え、広い範囲のメタファーとして概念を捉える可能性を持っている。橋元はこの相違を、**命題に言及する行為**と**仮人称をとる発話行為**として区別している。さらに、橋元は仮人称発話行為としてアイロニーを分析しているが、概念メタファーの反転という視点を取れば、メタファーのアイロニー効果の次元までも考察の余地はないだろうか。

この点については、本節ではその可能性に触れるに留め、次節で詳しく論じたい。

5 仮人称発話行為として捉えるメタファー

物語におけるメタファーのアイロニー効果については、先行研究での指摘を見るまでもなく、源氏物語、バーナード・ショー、そして樋口一葉の物語など、多くの文学作品に見出すことができる。しかし、私たちが日常的に感じている、こうした物語の中のメタファーによるアイロニー効果については、指摘されながらもその構造について分析が進められているとは言い難い。語彙と語彙の対

応レベルに関するメタファー分析の枠組み、例えば分析範疇の転写を、文単位を超えたメタファーについてもあてはめ、共有している研究が多く、理論的な検討、整理は曖昧にされていると言えよう。しかし、橋元はこの「II文全体が他の文との関係で譬喩を構成するもの」について仮人称発話行為という解釈を与えている。

仮人称発話とは「字義通りの発話が可能な立場の人間に視点を移し、結果的に言及とみなしうる発話行為を行なう（橋元、1989：86—87）」ものである。この場合の視点とは橋元（前掲書：87）が記しているように、久野（1978）の「外的世界の事態に対する一種のカメラアングル」としての「視点（empathy）」ではなく、発話行為の人称設定にかかわる「発話視点」を意味するものである。物語の場合、細部に組み込まれたメタファーを主題のメタファーへと転写できるのは誰だろうか。それは、物語の作者に他ならない。

さらに、橋元（前掲書：86—89）は、この仮人称発話の視点からアイロニーを説明している。アイロニーも字義通りの発話が可能な立場の人物に視点を移し、言及とみなしうる陳述行為を行う仮人称発話の一種である。ただし、「発話視点の仮設が、状態・地位・身分に関する評価的レベルにおいて垂直的かつ下方向の移動による場合に、自主的アイロニーが醸成されるのである。それが同趣旨の直截的表現より、より大きなインパクトを生ぜしめるのは、いま述べたような乖離の距離感に基づく（橋元、1989：88—89）」。

橋元は、母親が泥だらけの子ども顔を見て、「きれいな顔だね」というような皮肉の表現を扱っているが、さらに一文や段落、主題など広範な概念をこの仮人称発話の反転の軸で捉えれば、メタファー表現のアイロニー効果をメタファー表現の位相として整理できるのではないだろうか。また、文

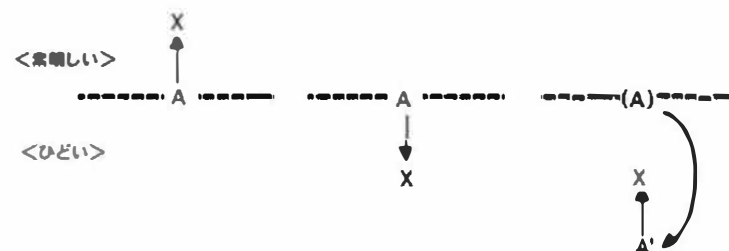


図7：仮人称発話によるアイロニー発話の解釈 化人類学で悪口関係という言葉葉があてられているように、

悪口はしばしば親しさの表現になりうる。そして、このような悪口に連なる冗談もこの反転の軸で考えることができよう。

そして、仮人称発話行為の理論を用いれば、メタファーにアイロニーの次元を含めることができる。ここで、橋元（前掲書）の枠組みにより、物語分析のためのメタファーの位相を整理する。

[物語分析のためのメタファーの位相]

I 命題レベルでの分析範疇の転写

命題内で対応するメタファー表現

II 仮人称発話行為としての分析範疇の転写

命題レベルを超えた文章や主題などの次元におけるメタファー表現

III 仮人称発話行為における評価の軸の反転による分析範疇の転写

アイロニー、悪口、冗談効果を生じるメタファー表現

前述した、Eco (1979=2011: 186—187) もファブラ (Fabula: 物語構造) という概念で、読者の解釈多様性を説明しているが、それは他でもない、読者が作者の視点を探り、物語を照射しようとする追体験の試みである。命題内の語彙から離れ、文章から人物描写へと連なるメタファーを捉えようとする時、冒頭の「紙飛行機」の詩で感じたように、私たちはふわっと空間を移動するような感覚になる。それは測らずしも、仮人称発話の視点をとる、すなわち自分の視点を作者の視点に近づけようとする身体感覚なのかもしれない。

6 おわりに

本稿では、物語におけるメタファーを分析するためのメタファーの位相について考えてきた。命題レベルのメタファーと、作者の発話行為の視点に重なる仮人称発話によるメタファーは、〈喩〉そして概念メタファーによる分析では、特に区別されないまま論じられていたが、橋元 (1989) のメタファー、そして

アイロニー分析によりその相違が明らかにされ、メタファーの位相を整理することが可能になった。今後は、実際の物語分析に応用することで、そのメタファーの位相を確認し、また物語のメタファーの特性が顕在化できるかを考えていくことが必要であろう。

さらに、橋元（前掲書：170）が触れているように、言語文化によりメタファーの解釈は相違する可能性がある。エカチェリーナ・ブトワ（2010）は、三島由紀夫の『金閣寺』におけるメタファーのロシア語翻訳について分析している。

「私が表現しようと思う大切なものは、瓦にひとしい無価値なものに堕ちてしまう」の「瓦」は「ゴミ」に、「鼻だけが長くて、流れてきた樹脂が固まったような形をしている。」のは「流れてきた樹脂が固まったような形」はロシアの読者が想起しやすいような「つらら」と直訳されている。翻訳者は読者が原文のメタファーをイメージしやすいよう二つの言語文化間のメタファーの転写を工夫していることがわかる。

次の例では、山が音に包まれていたという原文が、山が鳴っていたと訳されている。

「山々は蝉の声に包まれていた」（p. 49）

«склоны звенели от стрекота цикад»（p. 95）

ロシア語で「包まれていた」を意味する окутан, окружен は音を表す言葉と合わせて用いることが出来ないため、山々が「鳴っていた」という喩えが用いられている。

（エカチェリーナ・ブトワ、2010：136より）

さらに訳者は「とりもち」という文化的に限定される語彙を、「罨」と一般的な語彙を用いることで、読者に文意を伝えている。

「彼は内界の濃密な^{うら}藪から身を引き離そうとじたばたしている小鳥に似ている。」（p. 7）

«похож на птичку, бьющуюся в отчаянных попытках вырваться на волю из силка – силка собственного «я»»（p. 42）

ここでは主人公の心の葛藤が描かれている。ロシアではとりもちを使って鳥を取る方法は知られていないため、この部分は、かつて鳥を捕まえるために用いていたわな「силок」と

いう言葉で訳している。無論イメージは多少変わるが、訳者はとりもちの説明を持ち出すよりも、ロシア人にもよくわかる表現、はっきりと思いつかべることの出来る表現を用いることを選んだ。

(エカチェリーナ・プトワ、2010：140)

このように言語文化圏の違いにより、物語の中のメタファーは異なった概念に転写され、作者の視点に重ねる仮人称発話行為も同一ではない可能性がある。物語が翻訳される際、隠喩、暗喩の相違を含め、メタファーがどのように扱われるかを探ることもメタファー分析の重要な、そして魅力的な課題であろう。

【参考文献】

内海彰 (2003) 「言外の意味のコミュニケーション：語用論概説」『人工知能学会誌18 (3)』337-345頁

ウンベルト・エーコ (2011) 篠原資明訳『物語における読者』青土社＝
Umberto Eco (1979) *LECTOR IN FABULA*, Gruppo Editoriale Fabbri
Bompiani.Sonzogno Esta S.p.A.

エカテリーナ・プトワ (2010) 奈倉有里訳「比喩の翻訳法—三島由紀夫の『金閣寺』のロシア語訳について」『現代文芸論研究室論集』129-147頁

岡村雅史 (2003) 『アイロニー発話の認知的分析—発話理解とコミュニケーションの統合モデルに向けて』京都大学人間・環境学研究科博士論文

兼沢純子 (1995) 「メタファーと認知2」『大阪芸術大学紀要 芸術18』62-68頁

河添房江 (1992) 『源氏物語の喩と王権』有精堂出版

Grice Herbert Paul (1989) *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press.

Searle John (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge University Press.

笹川洋子 (2021) 「物語構成から読む『にごりえ』のメタファー：物語空間・発話行為・物語構造」『神戸親和女子大学言語文化研究 (15)』神戸親和女子大学総合文化学科、27-62頁

笹原常世 (2002) 『假泊港』港の人

- 清水啓子 (2007) 「認知言語学からみたシェークスピアーマタファー理論を中心にして」『文彩 (3)』熊本県立大学文学部、16-25頁
- 鈴木宏子 (2000) 「『古今和歌集』の〈喩〉—表現・配列・歌ことば—」『日本文学49 (5)』27-34頁
- Sperber Dan & Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- 高田祐彦 (1987) 「古今和歌集の〈喩〉」『一冊の講座 古今和歌集』有精堂出版、453-462頁
- 高谷遼平 (2016) 「文脈主義の新展開：メタファー分析を通して」『哲学No.137』三田哲學會、89-114頁
- 谷口一美 (2006) 『学びのエクササイズ認知言語学』ひつじ書房
- 出口菜摘 (2014) 9 「アイロニー効果をもたらすメタファーについて—Robert Frost の “The Road Not Taken” の場合」『京都府立大学学術報告 人文 (66)』1-10頁
- 鍋島弘治朗 (2016) 『メタファーと身体性』ひつじ書房
- 橋元良明 (1989) 『背理のコミュニケーション』勁草書房
- Freeman Donald C. (1995) “Catch[ing] the nearest way” : Macbeth and cognitive metaphor. *Journal of Pragmatics* 24 Pp.689-708.
- Pielenz Michael. (1993) *Argumentation und metaphor*. Tübingen: Gunter Narr Verlag
- 最上英明 (1994) 「メタファーと認知」『香川大学一般教育研究第46号』71-80頁
- Jakobson Roman Osipovich (1956) *Two Aspects of Language and two types of Aphasia Disturbances*. *Fundamental of Language*. Mouton. Pp.53-82.
- Lakoff George & Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago
- Lakoff George & Mark Turner (1989) *More than Cool Reason*. The University of Chicago Press.